
ひと夏の記憶

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひと夏の記憶

【Nコード】

N0528Q

【作者名】

まなつか

【あらすじ】

どんな事をしても死ねない僕。世では『不死身』と呼ばれる存在だ。そんな僕が入院している病院で余命一ヶ月と宣告された少女と出会う。

僕はその娘にだんだん惹かれていくが――

夏のひとときを駆け巡る死ねない少年と人生を生き抜きたい少女の恋愛ストーリー。

第一話 「不死身」へ一稀

「次こそ死んでやる」

夏の夜の蒸し暑い空気。半分都会で中途半端なうるささ。車の行き来する音が右へ左へ移り変わっていく。下を見下ろす。赤い車のランプが点滅していたり、信号機が点滅していたり――

もう見飽きた景色だった。

一体何回目の夏だろうか。

「こんなのもう見ていたくない」

僕は地面を軽く蹴って飛び降りた。

体がジェットコースターに乗っているような感覚になる。飛び降り自殺は何度目の経験だろうか。数えきれない。

病院の白い壁、そして、コンクリートの黒い地面が見える。次の瞬間、視界と思考回路が吹っ飛んだ。

「……丈夫か？ おい！ 夏野！」

その聞き飽きた声で僕は目を覚ます。目の前には白衣を着た医者。谷川が僕の顔を覗き込んでいた。先ほどまで聞こえていた車の喧噪も夜景も何もない。

「……と、いうことは……」

「はあ……」

深くため息をつく。それはもう諦めにも近いため息だった。

「はあ……じゃねえよ！ 何やってんだよ！ お前！」

個室の病室に谷川の少し高めの声が反響する。僕はそつとベッドの横の2つの時計に目をやった。いつかの誕生日に両親からもらったものと自分で買ったものだった。その両親は既に他界している。もう何十年も前の話だ。

「谷川……まだ朝の四時だぞ。大声出すな、迷惑だ」

「……え？ あ、ああ。ごめん」

ようやく落ち着きを取り戻した谷川はベッドの横のパイプ椅子に腰をかけた。

「あんな夏野。お前はどんなことしても死ねないんだ。わかってるな？ いわゆる不死身なんだよ。だから——」

「うるさい。そんなことわかってる」

僕は奴を一喝してから目を逸らし、天井に眼を向ける。白い天井には無数の黒の模様みたいなものが付いていた。数える気に昔なつたが結局わからなくなった。

奴はため息を軽くついてから立ち上がって何も言わずに部屋を出て行った。

再び訪れる静寂。なんだか少し心細かった。もう一度時計を見る。両親が買ってくれた時計は一二時ぴつたりを指したまま動かなくなった。電池を替えても動かない。修理屋さんに持って行ったら「こんな時計見たことがない」と言われてしまった。隣にあるデジタル時計はきつちりと時を刻んでいた。

部屋はクーラーのカタカタと言う音しかしない。

僕はいつでも一人ぼっちなんだ。

三時間後僕は部屋に運ばれてきた朝食を平らげて、部屋を出た。

なんの当てもなく歩く。それが日課になっている。ここは矢土総合病院西病棟8階。重症患者や特殊な患者が入院しているところだ。僕はここに生活している。不死身なんてのは特殊中の特殊。世界にも例がない。マスコミもなんでも僕のところに来たが、次第に忘れられていった。国からの研究補助があつて僕は生活することが許されている。もちろん、補助金を止められても死ぬことはない。だが死ぬほどの空腹を味わうことになる。いわゆる生き地獄というものだ。

僕は何階か下の階に降りる。……ここは5階の消化器系か。

「嫌だっ！ イヤイヤイヤ！ 死にたくないよ！」

僕が曲がり角を曲がるとドスツと胸から腹にかけて鈍い痛みが走る。

胸のあたりで「きゃっ！」という女の子の悲鳴。

「うわ！」

とっさに閉じていた目をゆっくりと開ける。すると床に女の子が倒れていた。パジャマ姿の彼女は背が小さく、弱々しかった。

「あぁっ、大丈夫？」

僕は半ば反射的に声をかける。その後ろから母親と思われる女性が走ってくる。

「ちよつと、美咲！ 走るから……。あ、すいません。……この子

……」

母親もなんだか弱々しい感じがした。ほっそりしていると云うよりもげっそりしていた。もう何日も寝ていないように見える。

「あ……」

その隙について美咲と呼ばれたその少女は起きあがって走り去っていった。

第一話 「不死身」へ一稀（後書き）

こんにちは。まなつかです。

今回は病院ものです。夏ですので、気合を入れて書いていきたいと思っています。

今回の作品は、設定をあきようさんに書いてもらいました。私もそろそろ勉強をしなくてはならないので……。

何かしら知識不足ですが、最後まで読んでいただけたら嬉しいですよ。

感想もきつつーいのでいいのでどんどん書いてくださいね。

それでは、また。

——追記（2011年11月12日）

また一から改稿を行っていききたいと思います。

第二話 「終わりの始まり」《美咲》

話は今から一年前にさかのぼる。

自分でいうのもなんだけど、私は普通の子だったと思う。というより至って平凡。中学校ではたいして目立たず、成績も運動もそこそこ。顔もそこまで垢抜けているわけではなく、普通だった。恋愛面でも今まで片思いしかしたことがなかった。

そんな私が普通じゃなくなったのは、中学3年の夏だった。私はソフトボール部に所属していた。真夏の焼けるようなグラウンド、土の匂い、照りつける日差し、みんなの応援。それだけは何故か今でも鮮明に思い出すことができる。

夏真っ盛り。私たちのチームは地区の大会で決勝まで進出していた。私はキャッチャーのポジション。ピッチャーが投げる白い球を受け止める。

パスツッという気持ちのいい音がして手に確かな感触を得る。そんな感じが大好きだった。

そして、決勝戦の日。とても暑い日だった。今年に入って一番の猛暑だそう。そんな中でも私はいつも通りボールを受ける。4回裏、ツアウト1、3塁。

私はピッチャーに向かってサインを出す。そのサインにピッチャーは頷く。そして相手が大きく振りかぶって白い球を――。

何故、その時だったのかはわからない。

何故、そのタイミングだったのか理解できない。したくない。

私は急に頭が今までにないくらいに痛くなった。息が急に苦しくなる。蝉の声が遠ざかっていく。

バットのカーンという気持ちのいい音が遠くで聞こえた。

ああ、何でだろ。

ここまでがんばってきたのに――

私はすぐに救急車で地元の大きな病院へ搬送された。それがこの矢土総合病院。すぐに入院して精密検査を受けることになった。そしてその結果、くも膜下出血ということがわかった。

すぐに頭を開いて手術をした。なんとか一命は取り留めることができた。そしてその後から今まで入院治療している。

手術後に聞いた話だが、私たちのチームは負けた。私はそれの言いに來たキャプテンに「そっか」としか言えなかった。

もう私の中でソフトボールなんてどうでもよかった。なんだかとりついていた者がすつといなくなったような清々したような感じ。だけど心が空っぽだった。

第二話 「終わりの始まり」 〈美咲〉（後書き）

こんにちは。まなつかです。

いろいろ並行して書いていますが、なんとか大丈夫そうです。

2月には一年で重要なテストがあるので、少しペースが落ちると思います。

そして、この物語はフィクションです。

実在の人物・団体等と一切関係ありません。

それでは

第三話 「不幸続き」へ美咲

夏休みが終わり、蝉の鳴き声が少し収まってきた頃、私は退院することができた。

久々に復帰した学校。クラスメイトの顔、先生のあくびが出るほどつまらない授業。受験のプレッシャー。全てが入院前と何も変わっていないかった。

「やつほー！ 美咲ちゃん！ おひさおひさー！」

「あ、クミ！ 久しぶり！」

初日の朝、教室に入ると私の幼なじみの高林久美子が相変わらずのハイテンションで話しかけてくる。なんだかとても懐かしい気分になった。

「久しぶりだね。美咲」

「あつ。ヤスちゃん！」

こっちの落ち着いた気品を漂わせている方は堤泰子。今年に入って友達になった子だ。最初は取っつきにくい感じだったけどいざ話してみるとこれまた気があった。人生、何か行動をしてみないとわからないものだと思う。

「どう？ 大丈夫なの？ 頭の方は……」

泰子が気を使ってくれる。その優しさに目が潤んだが――

「えっ！？ 美咲ちゃん頭がおかしいの？ やった、私よりバカになったー」

「アホかい！ おまえはアホか？！ たとえ私がアホになったとしてもおまえは私の2倍のアホだ！ この2アホ！」

「ひ、ひどーい……」

わざとらしくしょんぼりとうなだれて見せる久美子。本当に面白い。見てて飽きない。

「それで、大丈夫なの？ こんなに頭に來てても……」

「ははは。確かに頭には来るけど大丈夫だよ」

「じゃあもつとやってやるー」

久美子がおちゃらけて私をつついてくる。反応するのも面倒なので無視したらしょんぼりと壁にもたれ掛かった。

「ねえねえ、美咲知ってる？」

泰子が突然思い出したように私の肩を掴んでぐらぐら揺らす。

「新しくアイスクリーム屋さんができたのよ！」

「え……本当に?!」

アイスクリームは私の好物だ。そしてそれは久美子と泰子の好物でもあった。よく帰りにコンビニによっては買っているのである。

「今日帰りに行こうよ! アイスー!」

久美子が急に持ち直してテンションをあげるが私は今日病院で検査がある。

「残念だけどまた今度ね。行きたいけど今日は検査なんだよー」

「そっかあ」

泰子も久美子も残念そうな表情をする。

「ちゃんと、いつか、いつか! 一緒に行こうね」

久美子が珍しく私にしつこくすがった。

そのときチャイムが鳴ってみんな散り散りになって席に着いた。

ソフトボール部はもう退部した。そもそも、3年生は夏の大会で引退だからだ。

私は、みんなと楽しく笑ったりして中学校生活の残りの時間を満喫しようとしていた。

しかし……というよりやはり、そんな時間は長くは続かなかった。

「がんですね」

あの事件以来、定期的に病院で検査を受けていた。そして今日も何もないだろうと思って病院で検査を受けたのだが――。

「は……?」

一緒に来ていたお母さんも私も言葉を失った。心臓がドクンドク

ンと脈をいつもより大きく打っているのが聞こえるぐらいだ。何も考えられなかった。

「がんです。入院してください」

白衣を着て、眼鏡をかけたその川本という医者は淡々とそういつてカルテに何かを書き込んでいる。

そのとき既に私のどこかにもう人生のあきらめが出ていたのかもしれない。――死んでもいい、と――

帰りの車の中。いつもラジオがかかっている車内は静かで時折すれ違う車の音とお母さんの泣く声だけだ。私のために泣いているんだとはわかる。だけど、私は何も感じなかった。ただ、窓の外をぼんやり虚ろな目で見てるだけだ。

家に着く。いつもの玄関なのに、なんだか久しぶりに来るような感じがした。

私はふらふらとした足取りで階段を上り、自分の部屋にこもってベッドの上に倒れ込んだ。

何でこんな事になったんだろう。私は胸が苦しかった。苦しくて涙があふれてきた。速くなる呼吸がやがて嗚咽へと変わる。

「なんで……」

そうつぶやくともっと寂しさが増した。

こんな事になるならもっと沢山楽しいことをやっておけば良かった。みんなと遊んでいたかった。つまらないと感じていた勉強ももっとやっていたかった。

そんなやるせない後悔が押し寄せてきたけど、私はどうすることもできない。ただただその感情を生んでは泣き、生んでは泣き……と繰り返していた。

私は窓から外を眺めた。いつの間にか雨が降っていた。しとしとしとしと……と。まるで私の心のように空は真っ暗で一寸先も見えやしない。その闇をさらに深くまるで迷路のようにするかのように雨が音を立てて落ちてくる。寂しさが一気に増した。

その夜、お母さんから連絡を受けたお父さんが息を切らせて帰ってきた。

「美咲……っ！ そんな…… そんな……」

お父さんは私を抱きしめると声を上げて泣いた。こんなお父さんを見るのは初めてだった。いつでも優しく頼りがいのあるお父さんはいつも笑っていた。私は何もかける言葉が見つからなかった。「大丈夫」も「安心して」も。いつも優しくしてくれたのにこういう時に何もしてあげれない自分がかしい。

お母さんがお父さんを居間の方へ呼んだ。私は聞いてはいけないうような気がして二階へと引き上げていった。その間もずっと息が苦しかった。ガンの症状？ いや、違うだろう。

その夜は眠れなかった。

私の何が悪いんだろう、と。なんでこうも不幸が続くんだ、と。

こんな不幸ばかりの人生、いらない。

もう、生きたくない。

第三話 「不幸続き」へ美咲（後書き）

こんにちは。まなつかです。

誤字・脱字等ありましたら、ご連絡ください。

感想・評価もよろしく願います！

励みになるので。

第四話 「担当医」へ美咲

次の日の朝、着替えや身の周りのものを持って再び病院へと向かった。

とても日差しが暑かった。病院の周りの森から蝉が一生懸命に声を張り上げ、魂をすり減らしている。

私には個室が与えられた。私がいろいろと準備をしている間、お母さんとお父さんは別の部屋で医者と話をしているようだった。私はベッドの脇にある机に木製フレームに入った写真をたてた。家族写真だ。それは2年前に行った金沢の旅行で撮った写真だった。私はこれが気に入っていた。どうしてかはわからない。家族写真ならほかにもいろいろあるはずなのに。

そんなことをしていると、扉が開く音とカーテンがシャーっと音がした。

「失礼します」

そして、3人の人が一斉に入ってくる。

そしてその後ろから両親が入ってきた。お母さんは目を赤くして、ハンカチで拭いていた。お父さんは鼻をすすりながらうつむいていた。

その先頭に立っていたバインダーを抱えた若そうな医者しゃべる。ちよつとかつこいい顔をしている。きつとナースの間でモテモテなんだろうな。なんて悠長なことを思っていると相手が口を開いたので気を戻した。

「美咲さん、どうも担当医の川本順です」

「ど、どうも。初めまして」

昨日会った眼鏡の医者だった。私はおずおずと頭を下げる。なんかこの人にはなじめそうにもない。

「そして、補佐の谷川龍二です。よろしくね」

身長が低く、声が高めの若い医者だった。なんか川本と比べて感じの良さそうな医者だった。

「私は佐藤瑠奈。看護師よ。何かあったら遠慮なく言ってね」

優しそうでちょっとぼつちやりした人だった。

これで全員自己紹介が終わった。一人を除いていい人そうな人たちだった。私は少しほっとした。そう思いきや、眼鏡の川本が話し始める。私は再び緊張する。

「君はもう自分ががんだったことは知ってるね？」

私はがんとという言葉に胸が締め付けられた。しかし、もう受け入れるしかなかった。

「……はい」

「大腸がんだ。しかももうかなり進行している。末期というやつだ」……そこまで、進行していたということは……。

「一回明後日に手術をするからな。覚悟を決めておくようにな」

マジかよ。早速手術か。ってか、そんな悠長なことは言ってもらえない。私は末期がん患者なんだ。もうこうやって話している時点で刻々と死が近づいて来ているのかもしれない。

川本はそう言い残すと二人を連れて部屋から出て行った。

そしてお母さんたちが私が座っているベッドの横にやってきた。

お母さんは私の手を握った。そして私の目を見る。今にも崩れてしまいそうな、そんな目だった。

私はそれを見つめ返していた。しかし、お母さんは急にベッドにうつぶせになると大声を上げて泣き出した。

「お願いっ！ 頼むから死なないでよおお！ なんて、なんで美咲だけが……」

私だつて泣きたかった。もうどうしようもないこの感情をぶつけたかった。だけど、そうすることでもっと辛くなるかもしれない。

私はそう考えた。

お父さんの顔は見上げられなかった。私はずっと白いベッドの上で泣き続けるお母さんの頭を見続けることしかできなかった。

第四話 「担当医」へ美咲（後書き）

こんにちは、まなつかです。

感想・評価などをもらえると嬉しいです。
それでは。

第五話 「手術」〈美咲〉

そしていろいろ検査をしているうちに手術の日がやってきてしまった。

私は友達に会いたいと思い始めていた。だけど、まだ面会が許されていない。

私は時計を見る。もうそろそろ時間になる。心臓が高鳴っていく。「こんにちは」

ドアが開く音と看護師の蒼井がやってくるのがわかった。そしてシャーッという音とともにカーテンが開かれた。私の緊張が少し高まった。

「どう？ 調子は？」

彼女は体温計を渡してきた。私はパジャマのボタンを外してそれを脇の下に挟んだ。

「ええ。まあ」

なにやら計測器の数値をいろいろチェックしているようだった。

ピピピピと体温計がなる。私はそれを彼女に手渡した。

「ふうん、大丈夫そうね。気分はどう？」

「ええ、まあまあです」

「じゃあ、もうそろそろいいかな？」

「はい……」

私はすうつと息を吸った。もう、二度とこの空気が吸えないかもしれない。けどもう手術をする以外に選択は、ない。

「じゃあ、麻酔を打つね」

そして彼女は私に注射を打った。意識が遠くなっていた。

何かが頭に映る。海……？

次第にさざ波の音がする。

人の声がする。

「ねえ、美咲」

私は声がする方を振り向いた。去年クラスメイトだった安田だった。

「えっ？　なんで？」

私は彼女がいることに驚いた。

次第に思い出していく。この海は去年に学校で行われた自然教室と題した遊びとしか思えない旅行に行ってきたのだ。そこで彼女は波にさらわれて行方不明になっている。もう死んだと思われる。

「私、さびしいよ。暗い暗い海の底にずっといるんだもん。だから、来て……」

怖い。私は直感的にそう思った。

「おいでよ、ねえ。ねえつてば……！」

「嫌だ！」

「ねえ！　寂しいよ！　寂しいよ！　暗いよ！　怖いよ！」

「やめてええええ！　嫌だああああ……！」

——目をゆつくりと開ける。

夕日の赤みがかかった光が手に差し込んできている。口には呼吸器がはめられていた。

「美咲！　目を覚ましたの！？　よかったあ」

ベッドの脇にはお母さんがいた。そしてすぐに電話をかけると言っ
つて外へ出て行った。

私はさっきの夢を思い出そうと必死になったが疲れているのか思
い出せなかった。

……私、死ぬんだ。

そんなことをかすかに思った。
病室を見渡してみた。ベッドの横にはテレビと冷蔵庫があった。

私はテレビをつけてみる。クロアチア紛争のニュースをやっていた。私は別のチャンネルに替えた。すると今度はがんについての特集だった。私は嫌になってテレビを切った。

再び病室に静寂が訪れた。私は窓の外を見ている。夕焼けの中、カラスが飛んでいた。いいなあ、カラスは。自由でさ。

私は生まれて初めてカラスを羨ましく思った。自由になって空を飛びたいと思った。

第五話 「手術」へ美咲（後書き）

こんにちは、まなつかです。

久々にアップロードしました。

他の小説や、日々のストレス、勉強等々いろいろあったので……

これからは、こまめにアップしていきたいと思います。
それではっ

第六話 「チエさん」へ美咲

あれからあつという間に一年が経った。私は本当なら高校生活を満喫しているはずなのだが高校に入れるわけもなくこの病院に入院し続けていた。

最初は友人などの見舞いも多かったのだが次第に減っていき、ついには二人だけになってしまった。みんな薄情な奴だ。死ぬとわかつてる奴に近づきたくないのか、ただ単に面倒くさいだけなのだろう。

私はそんなことどうでもいいと思った。

もう夏真つ盛り。ベッドにまたがるようにしてある机の上のカレンダーを見る。七月とかかれた横にはひまわりのイラストが描いてあった。

「夏——か」

私はもう入院してそんなに経ったのか。まあ、ここでの時間の流れは相当ゆっくりに感じる。だけど、夏だと思うと一年前を思い出した。ソフトボールの試合のことか。

私はベッドから起き上がった。そして、スリッパを履いて点滴台の手すりに手をやって部屋を出た。金属部分がひんやりしていて気持ちがいい。

「今日はどこに行こうかな……」

もちろん、この狭く、白い四角い箱にそんな選べるような場所などない。

私は病院内を適当に歩いて回った。何をしたいというわけでもない。病院の外に出ると暑いからだ。

「快適、快適——」

そんな適当な節をつけた歌を歌いながら私は歩いて回った。途中、

知り合いとかに出会ったりもした。……知り合いと言ってもお年寄りが多いんだけどね。

この病院には私みたいな若い人は滅多に來ない。噂に聞いているが、何をしてても死ねない少年というのがあるらしい。一年間入院しているが一度も会ったことがないのは偶然だろうか。

私はふと思いつてチエさんのところに行くことにした。チエさんとは、私と同じがんで同じ頃に入院したおばあさんだった。確か、89歳だったかな。元気いっぱいの人で、すぐに仲良くなれた。余命宣告を軽く半年超えているスーパーおばあさんだった。

「あれ……？」

私はチエさんの病室のある廊下で立ち止まった。おばあさんの病室が開いている。……何かあったのだろうか。

私は急ぎ足で病室へと向かった。点滴台のキャスターがころころと音を立てている。リノリウムの床にスリッパの音が木霊する。

「チエさん……？」

病室は片付けられていた。ほとんどのものがなくなっている。

「……美咲ちゃん」

私は振り向いた。看護婦の佐藤さんだった。いつもの柔らかい表情ではなく、硬く、辛そうな顔だった。

「チエさんね、昨夜亡くなったの」

「え……？」

私は心臓がどきつと高鳴るのを感じた。キリキリと締め付けられる感覚に陥る。

そして視線をベッドに戻す。何も無かった。窓際に置かれた『おばあちゃんへ』とかかれたメッセージカードが何枚か重ねて置いてあった。横のテーブルに飾っていた大好きなひまわりは花瓶と数枚の花びらだけを残して無くなっていた。

「そ、そんな……」

私は目頭が熱くなるのを感じた。奥から熱いものがこみ上げてくる。

「チエさん……昨日は元気だったのに……」

私は必死に涙をこらえながらそういった。

「そうなんだよね。だけど、いつ死ぬかわからない状態だったし……」

佐藤さんは私の横を通り抜けて部屋に入っていった。そして片付けを始めている。

「家族の方が大方持つて行ったんだけどね。またあとで来るって」
ひらひらとシーツをまとめ上げ、抱えてこっちにやってきた。

「……お別れ、言えなかった」

ぼそりと私は言った。

「……うん」

佐藤さんはそのままナースセンターへと戻っていった。

私は一人取り残された。

……死んだ。チエさんが。私にとってそれは大きなことだった。

死というものを目の前にして私は恐怖を感じた。

「私も死ぬんだ」

ぼそりとつぶやいた。

テーブルの上にあった家族で撮った写真が寂しそうに見えた。

——夏が、始まる。

開いた窓から聞こえる蝉の声がそう、告げていた。

第七話 「恐怖」へ美咲

『お前は死ぬんだ。チエさんみたいに、跡形もなくこの世から存在を消す』

どこからか声が聞こえてくる。

「やだやだやだやだ！」

私は叫びながら目を開けた。すると、さっきの声はぴたりと止み、静寂が訪れる。

「……朝」

昨日はいろいろ考え事をしているうちに寝てしまった。私は昨日のことをすぐに思い出してしまい、また恐怖の感覚に包まれる。

「おはようございますーっす！」

元気な声と共にピンクのナース服に身を包んだ佐藤さんが入ってくる。私は現実引き戻された。

「おはようございます、佐藤さん」

「調子はどう？」

少し声のトーンを落として聞いてきた。昨日のことで私を心配してくれているのだ。

「……正直に言うと、不安です」

私はこの人にはなるべく本当のことを話している。この人は信用できるからだ。

「そっか、そうだね。あ、朝ご飯持ってきましたよ」

お盆に乗った朝食がテーブルの上に出された。ついでに体温計も差し出され、私はパジャマの第二ボタンまではずし、わきの下に挟む。

「いただきます」

私はそうやって箸を持つものの食欲がなかった。きつとさつきみた夢のせいだ。

「……大丈夫？」

佐藤さんが心配して訊いてくる。私は大丈夫だと言って無理に食べたが、途中で戻してしまった。

……私、死ぬんだよね……。

また夢を見た。今度は私が死んでいるという夢だった。死んだ私を上から見下ろす私。不思議な感覚だった。両親が泣いている、佐藤さんが泣いている、あのいつもクールな担当医の川本でさえ浮かない顔つきをしていた。

ずっと場面が変わった。今度は葬式だ。元クラスメイトが参列していた。私は目をそらした。

また場面が変わる。今度は私の身体が焼かれていた。めらめらと炎を上げている。

「……っ！」

私は耐えきれずにその場に吐いてしまった。夢の中なのに、何か現実味がある――

「――美咲？ 美咲！？」

お母さんの声で私は目を覚ました。

「大丈夫なの？ 今お医者さん呼んだからね」

お母さんが心配そうにそういった。私はまだ夢見心地だった。ベッドが汚れているのにも気づかなかった。私はずっとベッドから抜け出した。もう何を考えて行動しているのかもわからない。

「行かなきゃ……」

そんなことを無意識に口にしていた。

「行くって……？ どこへ行くの？」

「私はチエさんみたいになりたくない。ごめんね、お母さん」

お母さんの顔は見ずに病室を飛び出した。

「待つて！ 美咲っ！」

お母さんが追いかけてくるのがわかる。私は持てる力を振り絞って走った。もう一年も走っていないのだ。体力はだいぶ落ちている。そんなときふつとめまいがした。私は誰かの声を聞いた。

——あなたのお母さんは死に神よ。逃げないと殺されるわよ。

そんな声がした。ふつと後ろを振り返るとお母さんが全速力でやってくる。

「嫌だっ！ イヤイヤイヤ！ 死にたくないよ！」

私はそう叫んで走り出す。

そして曲がり角を曲がろうとしたその時——

「きゃっ！」

私は誰かにぶつかってしまった。

「あぁっ、大丈夫？」

男の人の声だった。それは私をもっと恐怖へと陥れているようだった。

「——待て、美咲……！」

「ひ……」

後ろから死に神が追いついてくる！ 嫌だ嫌だ！

私は必死に起き上がって走り出した。

もう嫌だっ！ こんな世界！

私は屋上へ向かって走り続けた。

第一話 「晴れた日の屋上」へ一稀

よく晴れた日だ。——うん、屋上へ行こう。

そんな単純な理由で僕は屋上へと向かった。病院のエレベーターのボタンを押して中に入る。

……そういえば、さっきの子は大丈夫だったのかな？ 半狂乱だったけど。

さっきの子、まだ若かったな。結構可愛かった。この病院で同い年くらいの女の子に出会うなんて久しぶりだった。

屋上への道は一旦九階で降りてから階段で屋上に行く必要があった。屋上のドアは普通開いていないが、鍵を盗み出して合鍵を作った以来入りたい放題だった。

僕は屋上のドアを一気に開ける。

すーっと夏の蒸し暑い空気が僕を包み込んだ。この感じ、嫌いじゃない。

僕は手すりのあるところへと向かった。手すりはもう何年も放置されているのか、ペンキがはげている。僕はそれに手についてそこから見える景色を一望した。

「……はあ」

ため息を深くついた。すると、少しだけ心が軽くなったように感じた。

ここから見えるのは街全体の景色だ。この病院はちょっと丘になったところに建てられているので周りが見渡せる。海まで見えるくらいだ。

僕はこの景色を見るのが好きだった。手すりから身を乗り出して街の方を見してみる。

「あれ……？」

いつもだったら沢山人がいるはずの学校に人がいなかった。おかしいな。

「あ……夏休みか……」

病院の中では年がら年中医者と看護師以外は休みのようなもんだ。僕は学校に行っていないのでいつしか感覚が鈍くなっていたようだ。本来だったら高校一年生か。

いつの間にか僕はあの暑い日のことを思い出していた。

小学校から帰ってきた僕はいつも通り手洗いうがいをしてテレビをつける。そうしているうちに両親が帰ってくるのだ。僕は好きなテレビ番組を寝転がりながら見ていた。

「暑い……」

少しずつ日は暮れていく。両親はまだ帰ってこなかった。いつもだったらとうに帰っている時間だ。

僕は寂しさを紛らわすようにアイスを口に突っ込んでテレビゲームをやり始めた。

何面かをクリアしていくうちに嫌な予感が高まっていった。次第に集中できなくなり、ゲームを切った。そして窓の外を見上げた。赤い空に赤い雲が泳いでいた。僕はそれをしばらく眺め続けた。

——いつまでも、いつまでも。

結局、両親は帰ってこなかった。いつまで経っても帰ってこなかった。僕はひとりぼっちになった。生活での面では問題はなかった。小さい頃から手伝いをしていたおかげで家事は満足に出来るし、うちではお金を銀行に預けず、金庫に入れていたからだ。それを計画的に切り崩していった。不思議と寂しくはなかった。

そんな生活が一年続いた。僕は小学校を卒業して中学校に入った。両親がいないということは内緒にした。誰にもばれてはいけけない。そんな感じがしたからだ。

しかし、家庭訪問の時になって両親がいないことがばれた。僕は施設に入れられることになった。僕は何も抵抗せず、それに従った。もう何も行動を起こす気がなかったのだ。

施設に入れられてからの僕は変わった。毎日どこにも行かなくな

り、空を見上げてぼーっとしていることしか出来なくなった。そしてあるとき調理場から包丁を持ち出して躊躇無く首を切った。……その頃の僕には、首を切れば死ねると思っていたからだ。普通の人間なら普通に死ぬ。でも僕は死ななかった。それから毎日のように死ぬことだけを考えて自殺を試みた。しかし、どれも成功した試しがなかった。流石に見るに見かねて施設の人が病院に僕を入れた。

——それがこの病院だ。

検査の結果、鬱病と判定。そして医者 of 川本に言われた言葉——

「あなたは、死ぬことが出来ない」
——それが一番シヨックだった。

僕はそこまで思い出して我に帰った。そしてこれからまた飛び降りてみようかと思った。もうこれで通算百一回目の自殺未遂だ。というか僕には自殺癖がついてしまっているのかもしれない。

僕が手すりに足をかけようとしたその時——
バンッ！

大きな音と共に屋上のドアが開いた。そして、すぐにボタンと閉まった。

「誰っ……？」

僕は足を地面について振り返った。

「えっ……?!」

さっきの女の子だった。ひどくやつれているような顔だった。黒く、短い髪が整った顔を引き立てていた。

不覚にも、心臓がどくと大きく脈を打った。そして、ゆっくりと深呼吸をして言葉を放った。

「あの……どうしたの？」

第二話 「駆け上がった先」 〈美咲〉

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

私はそう叫んでいるのかつぶやいているのかわからないほどに混乱していた。そして無我夢中で死に神から逃げるように階段を上っていく。

カツカツカツ——私の足音が階段に響く。

はあはあはあ——私の荒い息づかいが耳にまとわりつく。

私は階段を上りきって屋上のドアにたどり着く。——ここはいつも閉まっているから開くはずがない。私は少しの可能性にかけてドアを引いてみたが、やはり開かなかった。

「うう……！」

私は急いで一階下へ向かった。下には行きたくなかったがそれしか方法はない。

途中で医者に捕まってしまった。

「おい、どうした？」

川本だった。

「探したんだぞ。早く病室に戻れ」

「い、いやだっ！ 私はまだ死にたくない！」

「死なねえっての！ いいから戻れ」

「やだやだやだ！」

「だーっ！ うるせえ。ここは病院だぞ」

「……う……」

私は腕を捕まれていて逃げられなかった。そこで何とかして逃げだそうと頭をフル回転させる。

——そうだ。

「あ、蒼井さんだ」

「えっ！？」

いまだっ！ 私はぱつとそこを離れると階段の方へ戻っていった。そして迷った末、屋上へ向かうことにした。

川本も馬鹿な奴だ。蒼井さんだけにでれでれして。男ってホント単純。高校生（本当ならば）にも扱える簡単さね。

しかし、屋上のドアの前に来てさっきのことを思い出した。しまった、ここ、開いてないじゃん。だけど下からは川本がコツコツと足音を立ててやってきている。

私はそつと屋上のドアを再び引いてみた。すると、先ほどとは違ってすーっと開いた。私は怪しく思っただけで再び閉めた。すると、今度は下の方からこちらの方へ向かってくる足音が聞こえた。川本かっ！？ 速いな。

「おい！ 美咲！」
ええい！

私は勢いよくドアを開けた。そして隙間にすりりと身体を滑り込ませてボタンと閉めた。

「誰っ……？」

私が声に驚いて顔を上げるとさっきぶつかった少年だった。

「えっ……？！」

私も声を上げてしまった。そして彼の姿を見る。身長は180くらいだろうか。顔はそこそこ。なんか、傷だらけ。

「あの……どうしたの？」

彼が訪ねてきた。

私は迷った。だけど、迷う暇もなかったようだ。川本が扉を開ける。

「おい！ ——って何で開いてんだよ！」

「あ——川本？」

「一稀？ な、何でお前がここにいるんだ？」

あれ、知り合いだったのか？

——私の乱れていた精神状態はいつの間にか収まっていたようだった。

第三話 「友達」へ一稀

「どういうことだよ？」

川本がそういった。僕は返答に詰まった。

「なんで開いてんだよ？ 鍵、盗んだのか？」

「ああ、そだけど」

諦めて罪を認める。やつは少し眉間にシワを寄せてから考える素振りをした。

「一稀、こいつを知ってるか？」

彼はさつき入ってきた女の子に指を向ける。まだ息を弾ませていたがしつかりとした目でこちらを見つめている。

「知らないけど、何？」

「……少しは目上の人への言葉遣いを考えろ」

「はい。……それで、なんですか？」

川本は「偶然か」とつぶやいてから「あ、そっか」と一人で納得して

「お前、友達になったらどうだ？」

「へ？」

思わず変な声が出てしまう。僕は彼女の方を向いた。彼女も驚いて顔を真赤にしながら足元のコンクリートの破片を蹴っていた。

「な、なんでですか？」

「いや、お前友達いないだろ。同い年位のはずだが」

「あー、えと、名前は……」

「水森美咲だ。水の森に美しく咲くと書く」

……呼んでみるか。緊張するな。

俺はすうーっと息を吸った。そして――

「……美咲さん？」

「え？ は、はい！？」

彼女を呼んでみると飛び上がって驚いた。

「えと……よ、よろしく」

「あ、うん。……そっちの名前は？」

彼女は目線を下に向けてもじもじしながら言った。

「夏野一稀。よろしく……」

「うん」

なんだか不思議な感覚だった。

「おお、青春だなあ。それじゃ」

川本はひとしきり頷いてからそう言って白衣をひるがえして立ち去ってしまった。つくづく勝手な奴だ。

僕は彼女の方を向いた。彼女と目が合う。……やっぱり綺麗な子だな。

その時、横から風がびゅーっと吹いた。彼女のパジャマがパタパタと舞う。

「あのさ一稀くん、もしかしてさ、死ねない……の？」

彼女が躊躇しながら訊いてきた。僕は黙って頷いた。

「ちよつとさ、話さない？ 私、いろいろと話したいことがあるの」

「いきなり？ 他人同然の僕に？」

「あつ……ごめん。そうだよね……」

彼女は重い病気でも抱えているのだろうか。だとしたら少しでも話して気を楽しませてあげた方がいいかもしれない。僕の薄い人生経験から導き出した。

「いいよ、話そう。お互いのこと、知らなきゃ友達なんかやってられっかだよね」

「あはは……そうだよね」

そう言って僕らはフェンスにもたれ掛かりながら話をすることにした。

第三話 「友達」へ一稀《（後書き）

こんにちは、まなつかです。

最近、暖かくなつて緑も多くなりましたよね。

いいですね。もうそろそろ春です。春になったら取材で田舎に行きます。（ここも十分田舎ですが）

受験？ 知りませんよ。あははは。

この物語は、あきようが設定をがーつと書いて僕が書いています。漢字一文字でも十分に妄想できる、変態です。なので4KBもの設定があれば十分ですよ。

それではっ

第四話 「人間関係」へ一稀

——全部聞いたあと、僕は何も言えなかった。彼女も何もいわなかった。そしてそろそろお昼だからと言い残して屋上を去っていった。

一人残された僕はぼーっとこの町の景色を眺めた。

僕と美咲さんの出会いはありふれた、奇跡なんだろうな。

ほら、その公園でも一組の男女が楽しそうに話している。僕らと違うのは何も抱えていない、幸せだってことだ。

「……………」

それを見ていると涙がこみ上げてきた。

「ああっ…………くそっ…………」

なんて理不尽なんだよ。——そう僕はずっと思っていた。自分ひとりで理不尽だと思っていた。悲劇の主人公だと思っていた。だけど違う。今は美咲さんがいる。彼女も理不尽な人生を送ってきたんだ。

「はあ」

深い溜息を着いた。僕は爪をいじりながら考える。僕は彼女に何かしてあげられないだろうか。残された彼女の時間を楽しい物にしてあげられないだろうか。

カタン——ドアが開く音がした。振り返るのも面倒なので僕はそのまま爪を見ていた。

「どうだ？ 調子は仲良くなれたか？」

「川本か」

彼はそのまま僕の隣に来た。そして同じようにフェンスにもたれかかる。緑色のフェンスがキシキシと音を立てて歪んだ。

「話は聞いたか？」

「はい」

「……そうか」

それきり彼は黙り込んだ。涼しい風がヒューツと吹きこんでくる。「世界は広いな。俺もこんなところで一生を終えると思うと逃げ出したくなる。もっともつと世界を見てみたいと思う。なあ、お前もそう思うだろう?」

「……そう……ですね」

いきなりそんなことを語りだした僕は少し戸惑って敬語を使ってしまう。

「美咲はもうそんなに長くない。奴もこんなところで最期を迎えないなんて思っていないだろう」

彼がいったい何を伝えようとしているのか僕は少しずつ分かってきたように思う。僕も彼と同じ思いだ。僕は死ぬことが出来ないけれど死ぬときはこんなところに閉じこめられたまま死にたくはない。「だがな——浅い人間関係は脆いぞ。見てみる、あの公園を」

僕はさっき見ていた公園をふたたび見る。片方の女子は顔を手で覆って肩を震わせていた。もう片方の男の方の姿は見当たらなかった。

「彼女はうちの病院に入院することになった奴だ。もうそんなに長くない。だから焦って彼氏なんかを作るとか張り切っていたけどあのザマだ」

胸が少し傷んだ。もうあと少しの人生。欲しかった恋人を求めた方がいいが、それが逆に自分を傷つけることになるなんて。

「俺は恋愛だけが全ての幸せだとは思ってはいいない。他にもいろいろな幸せがある。この間亡くなったチエさんを知っているか?」

「知らない」

「そうか、結構な騒ぎだったんだがな。彼女は深い人間関係をずっと築いてきた。だから死んだ時みんなすごい心を痛めた医者なんてものは死をよく前にするが、それでも相当堪えた奴もいた。そんなけ慕われていたチエさんは幸せだったんじゃないか? と思う」

「うん」

「他にもある。少し前の話になるが、あるおじいさんがいてな。その人は絵葉書を書くのが趣味だったんだ。彼には送る人など誰一人いなかった。ずっと一人ぼっちで生きてきた」

「絵葉書……？ 入院してからか？」

「ああ、入院し始めてから始めたそうだ。毎日一枚、必ず描いていた。そして最期はたくさんのお絵葉書に囲まれて死んでいったよ。幸せそうな顔をしていた」

僕はなんて答えたらいいのかわからなかった。

「けどそのおじいさんは言っていた。『これを自慢できる友人が欲しかった。私にできた友人はみんな私から離れて逝ってしまった。若い頃はそんなことがよくあったもんだよ。戦後はな。だから私は人間と深い関係をもつことを嫌った。——だけど、今思うと寂しいものだ』ってね」

「……」

「……だからな、俺はお前らに浅い関係を築いてほしくない」

「それはどういうことだ？」

「お前も少しは気になってるんだろう？ 美咲のことが」

「……なんとも言えない。今日出逢ったばかりだから」

「そうだよな、普通はな」

川本はフェンスを背にしてすると座り込んだ。僕はそれを目で追う。

「タバコ、いるか？」

川本はポケットからタバコの箱を取り出して言った。

僕は不死身の身体をしているので何をしても身体は傷つかないし、汚れない。川本はそれを知っての上でこうやって勧めてくるのだが、未成年にタバコを勧める大人はろくなヤツじゃないと思う。川本は無言で僕を見つめてくるので仕方無しに僕は一本受け取った。川本と同じようにフェンスに背を向けて座った。ライターを渡してもらって火をつける。タバコなんて久々に吸う。

「……ふう」

僕は息を吐く。白い煙が口から吐き出された。

川本も火のついたタバコを咥えている。

「まだ話を聞く気はあるか？」

川本は空を仰ぎながらさういう。僕は反対に地面のコンクリートをとことこ歩くアリを見ていた。

「俺が医者になった理由——話してもいいか？」

僕は何もいわなかった。彼はそれを肯定と受け取ったらしく話し始めた。

第一話 「あまりにも過酷な始まり」 〈川本〉

俺は普通の家には生まれなかった。生まれたときから施設に入れられて育てられてきた。そこでの生活には何の不便も感じなかった。ただ家族がいないことに対して寂しさを感じていた。小学校に入ってから数年だったか忘れたが施設の園長に訊いたことがある。

「先生、どうしてオレは親がいないんですか？」

その時の園長の顔を忘れることは今でもできない。ものすごい悲しい目をしていた。いつもは慈愛にあふれた目が。

「大切なことだから覚悟して聞いてちょうだい」

「わかりました」

「……生まれたときにあなたの両親が離婚してあなたをここに預けたからよ」

その時の俺には理解できなかった。それを理解したときはものすごい苦しんだ。

そしてもう両親のことを考えるのはやめようと決意した中学一年生の春。俺に新たな出会いがあった。初めて好きな人ができた。その子は隣の席だった。すぐに気があって話すようになった。しかし、話してばかりいると先生に注意されてしまう。俺は彼女とノートを使つて会話することにした。

そんなある日。

『ねえ、川本くんて好きな人いる？』

そんなノートが隣から来た。俺はこれを機会に思いを告げようと決心した。

『いるよ』

そう返すと

『じゃあお互いに教えよう。帰ったら見る。それでいい？』

俺は彼女のノートに彼女の名前を書いた。どきどきしながら何度も漢字の間違いがなかったかを確認して閉じ、彼女に渡した。彼女もぎこちなく俺のノートを返してきた。

そして施設に帰ってノートを開くとそこには俺の名前が書いてあった。

俺は飛び上がって喜んだ。こんな気持ち、初めてだ。舞い上がっている俺に施設の人が何人かからかいの言葉をかけていった。

次の日がこんなにも待ち遠しいと思うことは無かった。学校に着いて席に座る。もうすでに彼女は座っていた。

そしてノートをさっと渡してきた。俺は戸惑いながらも受け取る。『ありがとう。ほんとうにうれしいよ！ 付き合ってくれる……？』そう書かれていた。俺は鞆を下ろすとさっとシャープペンを取り出し

『いいよ。こっちもううれしいよ！』

そう書いて渡した。ほんとうに幸せな気分だった。

しかしそれはほんとうに短かった。いや、短すぎた。

「うっうっ！」

「おい！」

一緒に下校しようということになって帰る途中、彼女は急に胸の辺りを押さえて倒れた。苦しそうに息をぜーぜーしている。

俺はどうすることもできなかった。ただただそこにいておろおろしていることしかできなかった。

「……そうだ、救急車……」

やっと頭が回ってきて近くの民家に飛び込み、救急車を要請した。『おい！ しっかりしろ！』

「……川本くん。ありがと……大好きだから——」

しかし、救急車がここに来る間に彼女の心臓は止まっていた。一緒に救急車に飛び乗った。狭い車内。俺は顔を手で覆って泣い

ていた。そんな俺に医者……いや、救急隊員が

「しつかりしろ！ カレシがそんなんでどうするんだ！」

と怒鳴った。俺はそこから泣き止んでじっと彼女の姿を目に焼き付けた。

彼女は安らかに眠っていた。俺はもう一度目を覚ましてほしいと願ったがその願いは病院に着いて完全に絶たれた。

「どうして……うちの子が……」

彼女の母親が泣いた。俺はそれを見ることができず、目を逸らした。

「君が……君がちゃんと守ってくれていれば！」

彼女の父親が胸ぐらをつかんできた。それでも俺は目を合わせなかった。合わせれなかった。彼女を殺したのは俺だ。俺がもっとちゃんとしていれば助かったかもしれない。

俺はどうすることもできずに病院をあとにした。涙がこみ上げてきた。目の前にひらひらと桜の花びらが舞い降りてきた。

「くそっ……」

第二話 「虐めの果てに」 〈川本〉

それから数日してから学校に行った。葬式とかにはとてもじゃないけど参列できなかった。

「なあ、聞いたか？」

「何々？」

「ほら、この間死んだあいつ。川本と下校している最中に死んだらしいよ」

「マッジー？ それやばくね？ 川本の責任ってこと？」

教室に入つてすぐ、そういう言葉が耳に入る。俺はそいつらを見ることもできずに席に着いた。

ふと隣の席に目をやると綺麗な花がたくさん生けてある花瓶がひとつ、ぽつんとあった。

俺はうつぶせになった。涙が止まらなかった。最愛だった人を自分のせいで失ってしまった。それはもう取り返しのつかないことだった。悔しかった。無力な自分が。

俺は机の中に手を入れるとノートに触れた。彼女と交換していたノートだ。俺はそれに彼女に向けて最期のメッセージを書いた。

『ごめん』

それだけ書くと彼女の机の中に入れた。

「おい」

頭上から女子の声が降りかかってくる。俺は答える気力もなく突っ伏していた。

「おいっていつてるだろ」

俺は顔を上げた。次の瞬間右の頬に痛みが走る。そしてガタガタと机をならして倒れ込んだ。殴られたのか……？

「アンタのせいで死んだのよ！」

「……」

「アンタのせいで……せいで……ッ！」

俺を殴った本人も泣き崩れてしまった。それを周りにいた数名の女子が支える。そいつらも俺に冷たい視線を向けた。

「みんな……ッ！ 私たちは川本を絶対許さない。みんなも許しちやあいけない！」

そう彼女は叫んだ。クラス中の人は全員聞いていたと思う。

その日から俺は虐めにあった。靴の中に画鋏なんて可愛いものだ。俺の場合は理科室から持ち出した劇薬を含ませた布があった。他にも自分の物がなくなったり、教科書に落書き、直接の暴力、仲間はずれ……いろいろあった。教師らは見て見ぬふりをしていた。俺は次第に耐えられなくなった。

そんなある日俺はとうとう壊れた。

「お前らあああああああ！ そんなに楽しいか？ 俺をこんな風にして楽しいかよ！？ 確かに俺は何もできなかった。けどお前らだって無力だろう？ 何かできたかよ？」

朝のHRの時間に俺は急に立ち上がってそういった。教師を含め全員の視線が集まる。

「私だったらすぐに救急車を呼べた！」

ある女子が叫んだ。

「だったらやってみるやあああああ！」

俺はそう叫んでナイフをつかみ、教師の首元に刺した。次の瞬間真っ赤な血が吹き出る。

「きゃあああああ！」

叫び声が上がった。俺はぐちゃりとナイフを抜いた。女の教師はそのまま教壇に倒れ込んだ。

「呼べよ！ 呼べるなら呼んでみるよ！ 目の前で死ぬぞ！ こいつは！」

「嫌……嫌……！」

そいつは目に涙を浮かべて首を横に振っている。

「なんだ、できねえじゃねえかよおおおお！ 無力だ、みんなは無力だ！ 俺と同じだ！」

俺は教卓を思い切り蹴飛ばした。次の瞬間隣のクラスの教師がやってきて俺を取り押さえた。救急車が来たのは結局一〇分後で担任の教師の命は助からなかった。

第三話 「新たなスタート」 〈川本〉

俺はそのあと警察に連行された。マスコミにも騒がれたと思うが俺は知らない。少年院に入っていて服役していたからだ。

少年院を出る頃にはもうすっかり以前のような毒が抜けていた。

そして施設に入れられて、新たな生活をスタートさせた。

高校に入るために勉強をし、なんとか合格。そこからまたひたすら頑張った。俺の中に一つの目標があったからだ。

医者になりたい――

そう思うようになっていた。医者になって一つでも多くの命を救いたいと思った。それが俺にできる唯一の償いだと思った。

高校は勉強に全てを打ち込んだおかげで友達ができなかった。それでも良かった。そして愛知県にある大学の医学部に入ることができた。そこから今までずっとがんばり続けてきた。

谷川と出会ったのは大学の頃だ。中学以来、初めてできた友達。俺が殺人を犯した奴だと知っても彼は俺に接してくれた。とてもうれしかったし、何より楽しかった。

俺と谷川は一緒に地方の大型病院へと行くことに決めた。そこに不死身の少年がいると知ったからだ。俺らはその少年――夏野を研究しようと思った。だがそううまくはいかなかった。奴は研究に対して抵抗するからだ。俺らは研究をだんだん後回しにして他の患者の治療に専念するようになった。

俺は人をこの手で何人も救うことができたが、それと同じくらい……いや、それ以上に失ってしまった。だけどやりがいのある仕事だ。

そんなあるとき一人の少女が入院してきた。俺は最初にその姿を見たときに目を疑った。俺の初恋の女性とそっくりそのままだった

からだ。そして名字は違えど名前が全く同じだった。

「水森……美咲……？」

そう、俺の初恋の相手の名前も美咲なのだ。

俺はそれだけは何んとしてでも救いたかった。俺は手術の為に何日も練習をした。本を徹夜で読んだりもした。だが、手術は思うような結果にならなかった。美咲の余命はあと一ヶ月ほど。夏が終わる頃にはその小さな命も尽きていることだろう。それが何よりも悔しかった。

だから俺は残り少ない彼女の人生を少しでも良かったと言えるような物にしたいと思っている。

そこで、この広い世界の一部だけでもいいから見せてやりたいと思った。

俺も全然行ったことのないような世界に。

そこで使おうと思った”駒”が、お前——夏野一稀ということだ。

第一話 「赤いシミ」へ一稀

その話を聞いてから、僕は何も言うことができなかった。

「そうか……」

やっとのことですの一言が口から漏れた。

「……すまなかったな。お前にそんな話をして」

そういつて隣の医者は立ち上がった。そして何も言わずに屋上を去っていった。僕はその寂しそうな背中をただただ……見ることにできなかった。

「はあ……」

深いため息をつく。そしてゆっくりと空を見上げた。この世界は広い。人間一人が本当に小さく思える。

僕も立ち上がって屋上をあとにした。ちゃんと施錠はしておいた。

美咲さんの話、川本の話。

どちらも僕にとつてはとても重いものだった。なんのため息をついたことか……。僕はぼーっとしながら病院を歩き回っていた。ここが何階なのかもよくわからないが、僕の部屋がある8階ではない。

「しっかりして下さい!」

「ん?」

近くの病室で看護婦の大きな声が聞こえた。この声は蒼井さんだろう。僕は通りがかるとき中の様子をちらつと見た。

「……!」

思わず絶句してしまった。

カーテンに大きな赤いシミがあったからだ。血……だろう。

「——さん！　しつかり！」

必死の蒼井さんのかけ声が病室に響き渡っている。同室の人も起き上がって様子を見守っていた。

僕は入り口でただただ眺めているだけだった。僕には、何もできない。

「そこをどけ！　夏野！」

僕は反射的に身体を横に反らした。そこに白衣を着た男が通る。僕の担当医の谷川だ。僕をさっと一瞥すると病室の中に入っていた。

「谷川さん！　患者の容態が急変しました」

「落ち着いて、蒼井さん」

カッカツカッカツ……病院の床に誰かの走る音が聞こえる。僕はその方向を見た。汗をびっしょりかいた少女がこちらに向かって走ってきたのだ。

「どいて！」

「ごう、ごめん」

僕はまたもやさつと横によけた。少女は中に入っていく。そして数秒間があつてから「おばあちゃん！」という叫び声が聞こえた。その悲痛な声は僕の胸を苦しくさせた。同室の患者も同じように目を背ける人もいた。

「しつかりしてよ！　ねえ！」

それに呼応するのは彼女の祖母ではなく、蒼井さんと谷川の必死のかけ声だった。そこにもう一人の名前の知らない看護師が入ってくる。

「テラゾシン塩酸塩水和物、持ってきました！」

少女はだんだん元気を無くしてしまった。そして蒼井さんにちょっと外に出てと言われ、病室から出てきた。

「あつ……」

思わず目が合ってしまった。一瞬、気まづくなる。

「……」

彼女は俯いて、休憩所の方へと向かっていった。

「一稀くん……？」

「あれ？」

背後から美咲さんの声がした。僕が振り返るとパジャマ姿の彼女は不思議そうな顔でこちらを見ていた。

「どうしたの？」

「いや……ちよつとね」

「やすちゃんと知り合い？」

「へ？」

やすちゃんて誰よ。

「堤泰子ちゃん。私の友達」

「えーっと……さっきここから出て行った子？」

「そう」

「知り合いじゃないけど」

「そっか」

そういつてから彼女は病室の中を見た。

「もしかしておばあちゃんが……？」

「そう……みたいだね」

僕は苦しかったけど、なんとか言葉を吐いた。すると彼女の顔が一変して先ほどの少女が向かった休憩所の方へ駆け出した。

「おい……」

「一稀くんはここで待ってて」

「うん……」

僕はそこに立ち尽くしていた。しばらく経ってから事が収まったのか谷川と蒼井さん、看護師が出てきた。

「大丈夫だったんですか？」

「……お前には関係のないことだ」

谷川は冷たく言い放った。病院関係者はこういうことに関して口が硬い。

「美咲さんの友人なんです」

「お前はそいつと面識があるのか？」

「さつき目が合いました」

「あほか！」

怒鳴られて一瞬肩がすくんだ。……まあ、我ながらあほな言い訳だったけど。

「……まあいい。これから言うのは独り言だ。……治療を施した結果、安静になった。少しの間は様子見だが、どうなるかはわからない。……彼女が知るべきかどうかはお前には判断できない。彼女が決めることだ。絶対、ぺらぺらしゃべんなよ」

「独り言じゃないのか？」

「う、うるせえ」

奴はそういつて立ち去っていった。奴も、結構良い奴なのかもしれないな。

そう思い、僕は休憩所の方に足を運んだ。

第二話 「懲りない老人」へ一稀

休憩所へ行くと端っこの席に美咲さんと泰子さんがいた。時折泰子さんの泣き声となにやらぶつぶつ言っている声が聞こえる。それが耳の鼓膜を刺激する度に僕の心が締め付けられるような感覚になった。

「あ……」

美咲さんと目が合う。彼女は目で「少し別の所にいて」と伝える了解。僕は休憩所から遠ざかるようにして立ち去った。

行き先がないことはよくあることだ。仕方がないので外に出かけることにしようと思う。少し彼女らのことが気がかりではあるが、美咲さんならうまくやってくれるような気がした。

三つほど並んだ緑の電話機。そのうちの一つの受話器を取り上げてテレフォンカードを入れる。そしてすでに打ちなれた電話番号を銀色のボタンを通じて発信する。

——ただいま、留守にしておりますばきゅーんとなったらご用件と——

ガチャン。

受話器を置いた。

今日は桜田もどっかに行っちゃったかあ。そう思うと少し寂しかった。夏休みだっていうのにぜんぜんそんな感じがしない。

「おい、その少年」

「……………」

むーん……桜田以外に友達なんていないしなあ。

「おい」

困った……。

「おい！」

「はい!？」

我に返って振り返ると一人のじーさんが立っていた。和服に身を包んでいて、明らかに場違いな感じがするが、ここの病院に長く入院している患者さんだ。

「どーじたかのーうー、わしと話をせんか」

「あー」

暇だし、いつか。

「いいですね」

「よしよし、じゃあ今日はわしがじゅーすを奢ってやろう」

「あ、ありがとうございます」

ラッキー。

先ほどとは別の階の休憩所の自販機でジュースを買う。フルーツオレだ。じーさん——大岩さん——はイチゴオレを買っていた。おいおい、糖尿病と聞いているが……。

「内緒だぞ。男同士の秘密じゃ」

「何が秘密なんですか……ばれますよ、佐藤さんここ通りますし」「瑠奈か。あいつも立派になったもんじゃ」

僕らはいすに腰掛ける。ちなみに、大岩さんは佐藤さんの祖父に当たる人だ。

「わしが初めてアイツを抱いたときにやあ、そらまあ、ちっちゃかったもんじゃ。もう可愛いなんの。毎日面倒見ちよった」

「……いいですねー」

もう何回も聞かされた話に適当に相づちを打つ。そして紙パックを押して中の液体を口の中に流し込む。口の中にフルーティーな甘さが広がる。

「大岩さんは、お孫さんとお子さん、どちらが可愛かったんですか」「そーじゃのー。孫……かの。娘も可愛かったがな、やっぱり老後のやる事がなくなっただけに孫を抱くのとじゃ全然違うもんだ」

「へえ」

「わしが若かった頃はの、まだ戦後間もなくでな、闇市でな、米を買っては親とひもじい思いを――」

「ちよつとおじいちゃん!」

話の途中に女の人の声が割って入った。佐藤さんだ。

「何飲んでんのよつ!」

そして大岩さんから紙パックを奪い取る。

「あー! やめちよくれー! わしの、わしの命の源なんじゃー! 頼む!」

「何が命の源よ! 自ら命縮めてんじゃないわよ!」

「うわー!」

あんたは子供か!

「ちよつと夏野君! あなたも知ってたんだから止めてよ。私のおじいちゃん、糖尿病なんだからね」

「は、はい……」

矛先がこつちへ向いた。ちくしょう。

「……まったく」

ぶちぶちいいながら佐藤さんは去っていった。僕と大岩さんはほつとため息をついて顔を見合わせた。

「今はあんなんになつてな!。まったく、安心して入院できやせん! いやいや。あんたが完全にわるいつしよ!」

「ま、あいつもあいつなりにわしのことを心配しちよるのかもしれないなあ」

「……そうですね」

ゴゴゴゴゴ……紙パックの中が空になった。

「はあ……」

大岩さんはショックが大きいのか大きなため息をついて立ち上がった。

「さて、わしはもう部屋に戻るとするよ」

「あ、はい。ごちそうさまでした」

「なに、礼には及ばんよ」

そういつて立ち去っていく老人の姿はどこかっこよかった。

いや、

今、ポケットから何か取り出して食べてたような……。

懲りない人だ。

第二話 「懲りない老人」へ一稀（後書き）

こんにちは、まなつかです。

いやー、もう明後日模試なのにバリバリ書きちゃってますね。
はははははは！

というか完全に久々に書きました。

今までの話も少し変わっているところがありますので、もう一度読み返すと不自然なところが少し解消されているかもしれません。

さて、これからはなるべくちよくちよくひと夏の記憶を更新していきたいと思いますので、宜しく願います。

第三話 「空っぽの励まし」 《美咲》

「おばあちゃん……きっと大丈夫だよ」

私はやすちゃんに無難な言葉を選んでぶつける。

「そうだよね……」

彼女にそれを思いこませるように。きっと大丈夫だ、そうだ。

だけど私はわかる。チエさんが亡くなったように人は簡単に逝ってしまう。それを止めるなんてとうてい無理だと。

「おばあちゃん、昨日も元気だったのに、その前も……」

それも、そうだ。急に病気が悪化してぼっくり逝くなんて日常茶飯事だろう。

「大丈夫だよ、やすちゃん。ここのお医者さんはいい腕の医者だからすぐによくなるよ」

「うん……」

彼女は目尻を拭うと立ち上がった。

「おばあちゃんの所に行ってくる」

「うん、それがいいと思う」

「あのさ……美咲ちゃん」

「うん？」

伏せていた顔を彼女に上げる。しつとりと濡れた頬が幾分か血色を取り戻していた。

「死ぬのって……怖いの？」

「……」

今のやすちゃんになんて言ったらいいのかわからない。

「……怖いんだよね」

「怖い……かな。後ろから追ってきているような感じ。振り向けば死んじやいそう。だから私はいつも前をみて歩いてるんだけど……。それでもやっぱり怖いかな」

「そっか」

彼女はそれだけ言い残して姿を消した。

「まったく……」

ん……、この声は……

「佐藤さん」

「あつ、美咲ちゃん」

「こんにちは……どうかしたんですか？」

「いやねえ、うちのおじいちゃんが糖尿病なのにこんな飲んでのよ」

そう言つて彼女は手に持っていた紙パックのジュースを見せる。

「困ったおじいさんでしょ。あ、これあげよっか」

「あ、いえ……遠慮します」

「あはは、さすがに嫌よね。どう？ 体調の方は」

「今のところ大丈夫です」

「そう、ならよかった。じゃあ、私はこれで」

「はい」

彼女はそう言つとナースセンターへ向かつていった。

みんないろいろ大変なんだなあ。

私はすることがないので窓際についている冷房機器に手をかざしていた。微弱な風が手から熱を奪っていく。

外を見ると太陽が山に沈もうとしていた。そういえば……一稀くんはどうしてるんだろう。さっきは追い払っちゃったけど。

「やあ、美咲さん」

「あ……」

その聞き覚えのある声に振り返ると一稀くんが立っていた。

「あれ……顔の傷が消えてる……」

「え？」

さつき会ったときは傷だらけの顔だったのに。

「ああ、なんかすぐ直るんだよね、僕」

「そうなんだ」

彼は私の向かい側に座った。

心臓が、小さく、とくとんと動いたような気がした。

第四話 「みかんジュース」〈谷川〉

「ああ、くそう！」

僕はイライラしながら頭を掻く。フケがファサファサ飛び散った。
「おい、不潔だぞ、谷川」

先に部屋にいた川本がこつちを振り返りながらそう言う。

「ああ、だつてよお！」

「いいからこれでも飲んで落ち着け」

ここは医者たちの休憩室兼ミーティングルーム。川本が親切に紙コップに入ったジュースを渡してくれる。僕がここに置いているみかんジュースだ。

「……ありがとう」

それを一気に飲み干す。みかん独特の匂いと味が染み渡る。

「しかし、いつも思うんだがなんでみかんなんだよ。オレンジじゃだめなのか？」

あえてストレスの原因に触れることなく、話を持って行ってくれるのが彼のいいところだと思う。

「いやあね、僕んところさみかん農家でさ。んで、「新たな商売始めた」とか「れびゅーとかいうのをしてくれ」とか言って毎月こつちに送ってくるんだよね」

「お前の実家つて、和歌山だっけ」

「そうだよ。みかん生産高全国一位だ。祖父母はまだ現役で頑張ってるよ」

「はあ。どつりでみかんジュースなわけだ」

「そうそう、美味しいよ？ 川本も飲んでみる？」

「いや、俺はみかんアレルギーだから遠慮しとくよ」

「嘘だろ、それ」

僕は笑いながら立ち上がり、『ばーちゃん特製みかんじゅーす』と書かれたペットボトルを開ける。そしてさっき川本が差し出してくれた紙コップになみなみ注ぐ。

「いや、俺はいいって!」

川本が止めようとする。

「ははは、川本昔から柑橘類が苦手だもんなあ」

僕はそのコップを奴に差し出す。

「飲むのか?」

「大丈夫だって。みかんの味しかないから」

「ん……」

川本は恐る恐る口を付け、潔く一気飲みした。

「……どう?」

「……………」

何も言わず渋い顔でこちらを見上げてくる。

「はは、また飲みたくなったら言えよ」

「……………」

何も言わずに彼は立ち上がり、「すげーまずかったぜ。なんか、懐かしい味がしたわ」とか言って出て行った。結局は美味しいってことじゃないか。

僕は一人笑いながら紙コップを二つゴミ箱へ放り投げた。きれいな放物線を描いてそれはビニール袋がかかった灰色のゴミ箱に入る。

「よし、もうひとがんばりするか」

そう言っ僕も部屋をあとにした。

入ってきたときのあのイライラはどこかへ行ってしまったようだ。今度川本にみかんでもあげて礼の気持ちでも伝えないと。

僕は笑いながら白衣のポケットに手を入れ、患者が待っている病室へと向かった。

第四話 「みかんジュース」〈谷川〉（後書き）

こんにちは、まなつかです。

いや、マジこの二人好きなんですよ。なんていうか、BLうわなに
するやめろ

なんかみかんの生産高、愛媛か和歌山かどっちか迷うことがあります。
ます。

これで「谷川のほづが上」と覚えればオツケイですねb

この章はしばらくこつこついう日常的な話が続きます。
それでは。

第五話 「スズメ探し」へ一稀

「もうそろそろ日が落ちるね」

僕は窓の外を見ながらそう言う。

「うん……」

彼女も窓の外を見ている。ちらりと横顔を窺うと綺麗な顔が夕焼けに赤くなっていた。

彼女も目をこっちにちらりとよこす。そしてほえんだ。

「ねえ、一稀くん。カラスって、どう思う？」

「うーん、黒くてでかくて嫌だなあ」

「そう思うでしょ？」

「ん？ 美咲さんはどう思うの？」

「私は好きだな」

「ええっ!？」

カラスが好きな女の子って変わっていると思う。

「だって、自由じゃない。ああやってさ、何を叫んでいるのかわからないけど空を自由に飛べて……」

「あ……ああ……」

そういう意味か。だったらスズメとかでもいいような気がするけど。／

「ねえ、知ってる？ この病院のある屋上に夕方になるとスズメがたくさんやってくるって」

「えっ、そうなの？」

「見に行こうよ！」

彼女はガタリと立ち上がる。

「よし、行こうか」

僕も立ち上がった。

「ただどこにあるの？」

「わかんないけど誰かに訊けば分かるよ。前誰かがここで喋ってたのが聞こえたからさ。川本先生にでも訊いてみる？」

「うげえ……川本はヤダよ」

彼女はクスクス笑いながらじゃあ佐藤さんねと言うとナースセンターの方へ歩き出した。僕もその後について行く。

「えっ？ スズメ？」

運良く佐藤さんはナースセンターで資料の整理をしていたようで捕まえた。

「はい、この病院のどこかの屋上でこの時間、たくさんのスズメが集まるって聞いたんです」

「うーん……たしかになんかピチチチ聞こえるのよね。どこかは……分からない」

「そうですか」

そして佐藤さんは僕に視線を向け、一瞬驚いた顔をしたが、事情を理解したのかニンマリ笑った。

「美咲ちゃん、一稀くんとデートなの？」

「えっ……」

彼女は急に僕の方を振り返って顔を真っ赤にしてうつむいた。僕も恥ずかしくなって佐藤さんを睨む。

「あはは、二人で探しに行ってみたら？」

「……もう、行こう、一稀くん」

美咲さんは先に駆けだして行ってしまった。

「あ、待ってよ！」

僕も追いかける。後ろで「ひゅーひゅー！ やるねー！」と佐藤さんの声が聞こえた。ちくしょう、そんなんじゃないのに！ 後で弁解することにしよう。

「スズメ……ねえ」

美咲さんは諦めることなく次の人に尋ねていた。看護婦の蒼井さんである。美咲さんより背が高いので若干見上げていた。僕と同じくらいの背である。

「うーん……どっかの病室から見えたのよね、それ」

「ど、どこですか?!」

「覚えてないわ」

あっさり言われて美咲さんはうなだれた。

「あ、でも谷川先生なら知ってるかもよ。すぐその病室で診察中だから少し待っててごらん」

「はい！　ありがとうございます」

「んじゃ、またね」

「はい」

蒼井さんは僕のほうを見てもあまり反応を示さずに消えていった。

「ああ、スズメね。うんうん、見るよ見るよ。可愛いよねえ」

首から聴診器をぶら下げながら病室から出てきた谷川に美咲さんが詰め寄った。

「どこで見たんですか!?!」

「うーんと、どこだっけなあ」

彼は目をくるくる回しながら考える。

「こら！　美咲!」

静かな院内に響きわたる凜とした声。僕たちは三人そろってすくんだ。

「どこにいたの!?!」

「あつ！　お母さん……」

あ……さっき会った人だ。さっきって言っても午前中だが。

「美咲、朝病室飛び出して行ってからどこ行ってたの？　お母さん、

心配でずっと探していたんだからね」

「あつ……ごめんなさい」

そうだ、あの朝、僕と美咲さんが出会ったのだ。

美咲さんの母親は優しくそうな人だったが、やはり疲れた顔をしていた。

「あつ……先ほどはうちの美咲がご迷惑を」

僕に気づいた母親が頭を下げる。

「いえいえ」

「ねえ、お母さん。スズメ……」

「もういいから早く病室に戻りなさい。川本先生が待ってるのよ」

「あ……うん」

「それでは、谷川先生、失礼します」

谷川に頭を下げて、僕に会釈をしてから彼女の病室があると思われる方向へ行った。

「美咲さん」

僕は彼女を呼び止める。

「ん？」

「また、スズメを探そうね。次までに場所探しとくからさ」

「うんわかった。私も探してみるね」

「あの……病室は何号室？」

「西病棟の531だよ。そっちは？」

「こっちは西病棟の917だよ」

「また会おうね」

「うん、また」

彼女はひらひらと白い手を僕に振ってから母親の後を追った。僕はしばらくその姿をぼーっと眺めていた。

「おい、夏野」

「うふっ!？」

後ろに谷川がいたのを忘れていた。

「気色の悪い声をあげんな」

「なんだよ？」

「川本の戦略かなんか？　　ありや」

「……そう……ですね」

「……はあ、そうか」

彼は深いため息をついてからぽんぽんと僕の肩を叩いて階段の方へと消えていった。

なんなのだろうか。

まあ、なににせよ今日はいろんなことがあった。帰ってゆっくり休むか。

第五話 「スズメ探し」へ一稀（後書き）

こんにちは、まなつかです。

勉強の合間に書いているのですが、一話（2000文字程度）書く
と40分消費しております。ちょっとまづいような気がします。
今書いている1月5日は模試があるので……はは。

これでやっと一日目が終わりましたね。

長い長い一日でした。現実時間で言うと一年ですね。長い。

それでは、また。

第六話 「握り飯」へ一稀

部屋に戻る。自分一人に対して不相応な広さの部屋だ。ただ広くベッドの脇に置かれた二つの時計くらいしか目につくものがない。少し暑い気がしたのでクーラーの温度を27度まで下げる。

「はあ……」

今日川本が言っていたことを思い出す。彼のことを思うと少しだけ同情してしまう。

「なんだかなあ」

ベッドに腰をかけてテレビの電源を入れる。バラエティー番組がやっていたがぜんぜん頭にはいらず、消した。

川本は美咲さんを外の世界に連れ出してほしいというようなことを言っていた。

どうしろっていうんだ。外につて、病院の外か？ あの実夏の日差しなんかには彼女を当ててしまったらそれこそ一時間も保たないじゃないのか。

いくら考えても答えは導き出せない。

川本に訊くしかない。

それにしても……美咲さん、元気そうなのにもうあと少しの命だなんて……。

にわかに信じられなかった。

できることなら自分の命を分けてあげたい。

必死で生きようとしている彼女の姿を見ていたら、そんな気持ちが湧いてくる。

「夏野、飯だ」

「んあ？」

気がついたら寝ていた。半身ベッドからずり落ちていたが、なんとか体勢を元に戻し、入ってきた谷川の方向をみる。彼はお盆を持つて立っていた。普通看護師が持つてくるのだが、今日に限って彼が持つてくるということはきっと何かあるのだろう。

「なあ、夏野」

「何？」

お盆を受け取って、答える。今日の飯はハンバーグだ。谷川もポケットからコンビニで買ったと思われる握り飯を取り出した。

「食うか？」

「いや、いい。というか、何の話？」

「そうだな……単刀直入に言つと水森の話だ」

「……やつぱりな」

「話は川本から聞いた。おまえはどうするつもりだ、あの娘もそう長くはない」

「……僕は何もいえない。美咲さんの望むとおりにしたい」

「本人の意見を尊重するんだな？」

「はい」

「わかった」

彼はそれだけいうと立ち上がって、「スズメの場所、思い出したよ。ほら、窓の外を見てごらん」と言った。

窓の外を見るとたくさんのおスズメが屋上に集まっていた。

「ここ、防音ガラスになっていて、鳴き声は聞こえないんだよね」

彼女を呼ぶなら明日にきな、今日はもう暗い。そう言い残して彼は部屋を去った。

海のような色の景色に黒い生物がもぞもぞと息をしていた。

第七話 「目覚めの一杯」〈美咲〉

朝起きて部屋に備え付けられている洗面器で顔を洗う。少しぬるい水が心地いい。まだ同室の人は起きていない。私だけの朝だ。
「んっ！」

大きく伸びをする。そして今日はちゃんと着替えることにする。今日こそスズメを見つげるんだから。適当な服とジーンズを穿くと外に出た。

今日の病院の朝は静かである。時折外から鳥の鳴く声がある。

「おはよう、美咲ちゃん」

「おはようございます、佐藤さん」

「どう？ 調子は」

「はい、大丈夫です」

そう、と笑ってぐいと顔を私に寄せる。思わずドキッとして引いてしまう。

「カレとはどうなのよ？ あれから」

「か……かれ……？」

「そうそう、一稀くんよ」

「なっ、違いますよ。そういうのじゃありません。ただの……」

「……ただの？」

「た、ただの友達ですよ！」

私はムキになって叫んだ。しっ、と佐藤さんはその柔らかそうな唇に人差し指を立てた。

「わかったから……ね」

「もう」

「オンナ同士の秘密よね。あ、あと蒼井さんと川本先生と谷川先生に報告しなきゃ」

「……………」

口が軽いオンナですね。

「じよ、冗談よ。あ、私今少し時間あるからさお茶でも飲まない？」
「いいですよ」

休憩所についてソファに座る。時計を見ると5時だった。こんな時間にも働いているなんて大変だな、と思う。

「何がいい？ 飲み物」

佐藤さんが自販機から何か取り出しながら訊いてきた。

「ココア、お願いします」

「丁度品切れ」

「じゃあ、コーヒーで。加糖の」

「このフロアには存在してないみたい」

「……じゃあ、オレンジジュースで」

「このメーカーのやつ、美味しくないわよ」

「なんでもいいです」

「じゃあ、このタコス味で」

「ちょ、ちょっと待ってください！ 私が選びます！」

向かうとにつこり笑みを浮かべてココアを持った佐藤さんがいた。

「ひ、ひどい……」

「面白いね、美咲ちゃんは」

「もう！」

一見ぽっちゃりしてて優しそうな外見なのに、結構意地悪だったりする。

ソファに向かい合って座ると彼女は緑茶を選んだことに気づく。

「私ね、今ダイエット中なのよ」

「そうなんですか」

「大学生の時に付き合ってたカレが浮気しちゃってねえ。一週間前に別れてやったわ」

「そうなんですか」

「そうそう。だけど私にも非があるのよね。恋人がいる安心感から

なの、カレに甘えていたのか、付き合う前から10キロも増えたわ」

「なっ……」

それはすごい。ということは私がこの病院に来る前には結構痩せていたってことか。そういえば入院し始めのときはまだ少し……

「何、その目」

「い、いえ……」

「あのさ、どう？ 一稀くんは」

「どうって言われても……」

「意外とあの子、流されにくいのよ。だからあなたもしっかりしないよね」

「……はあ」

「おっと、誰か呼んでる。じゃ、またね美咲ちゃん」

「はい、ごちそうさまでした」

あつという間に仕事の顔に戻ってナースセンターの方へと走っていつてしまった。

あんなこと言われたら嫌でも意識しちゃうじゃない。……もう、高校生なんだし……。

だけどそれとは対照的にもうあと少ししか生きれないという暗い考えが心の片隅に居座り続けていた。

どこか行ってほしい。

だけど石像のようにそれは動かず、真っ直ぐ私を見続けていた。

第八話 「二日目の朝」へ一稀

あーたらしいあーさがきたーきーぼーのあーさーだ」

風に乗って聞こえてくる懐かしいメロディー。もう夏休みなのだ。夏休みといたらラジオ体操。僕も昔は――小学校の頃は参加して毎日ハンコをもらっていたものだ。

「朝はまだ涼しいんだけどな」

隣で川本がタバコをふかしている。ここは屋上なので一応セーフだ。僕が早くに起きていつものようにこっそりここで侵入して町を眺めていたら川本がやってきて僕の隣で何事もなかったかのようにしている。

「そうですね」

「お前って時々敬語使うよな」

「そうですね。不思議です」

ふうーと白い煙を吐いて「お前そういや小学校の頃からまともな人付き合いしたことなかったっけな」

「そうですね」

「ふっ、だからあんなこと言ったのか」

「あんなことって……？」

「ほら、昨日美咲と初対面だったはずなのに下の名前で呼んでたろ。普通は名字で呼ぶ。初対面かつ、異性だったらな」

「そうなんですか」

「いやあ……何も知らないってのもいいもんだな」
そしてまた沈黙が訪れる。

川本が二本目のタバコを取り出して火をつける。

「川本は仕事いいのか？」

「ああ、夜勤明けだからな。休憩してるんだ。そろそろ仮眠でも取

ることにするよ」

医者はつくづく大変な職業だ。

「あ、お前みかんは好きか？」

「え、うん。そこそこは」

「今度みかんジュースでもごちそうしてやるよ」

「え……」

「結構旨いんだよな、あれ。俺みかん嫌いなのに飲んじまったしな」

「どこのですか？」

「どこのって……メーカーは谷川の祖父母のどこだってよ。今日さつき電話で問い合わせたら送ってくれるとさ」

「へえー」

「さて、俺はもう戻る。ちゃんと鍵締めてバレないようにしろよ」

「はいはい」

そういうと川本は出て行った。

また一人になる。

今日は何しようか。

桜田でも呼んで遊びに行こうかな。あ、美咲さんも呼んで一緒に遊ぶか。

「……遊ぶ？」

美咲さんってがんでここに入院しているはずだ。普通何かしら身体に異変が起こっているはずなのだが昨日見た限り何も見えない。まあ、体内の中だからわからないけど。

「遊べるのかなあ」

「どうしたの？ 一稀くん」

「うわっ!？」

隣を見ると昨日と違ってちゃんとした私服を着た美咲さんが立っていた。

「おはよう」

にこりと笑いながら立っていた。

「お、おはよう……」

「あのさ、今日外出許可が出てるからさ、どっか遊びに行かない？」
ラッキーチャンス。

「うん、僕もいい天気だから誘おうと思っていたんだよね」

「やった！ あのさ、私の友達で高林久美子ちゃんってのがいるんだけど、一緒にいいかな？」

「うん、あのさ、こっちも桜田つてのがいるんだけどいいかな」

「いいよいいよ、みんなで行こう！」

「ところで——」

さっき疑問に思ったことを口にしてみた。

「……うん。特に痛みとかないよ。ちゃんとお薬飲んでるからかもしれないし。だけど、あともう少しだと思つと気分が悪くなったりしちゃうんだよね」

「そっか……」

もうあと少しでこの子の命は尽きてしまう。その事実だけは確かにここに突きつけられている。

「んで、どこに行くの？」

僕が訊くと彼女はもう決めていたようで「海！」と言った。

「いいねえ。僕も最近行つてなかったし。行こっか！」

「うん！」

彼女は笑つて「支度してくる」と行つてしまった。

結構可愛い。

「もしもし、桜田？」

『あ、夏野かい』

「そうそう、今日さ海行くんだけど一緒に行かない？」

『ほかに誰かいるの？』

「同い年の美咲さんとその友達の高林さん」

『女の子？』

「そう」

『今すぐ行く。どこに集合？』

「矢土総合病院前」

『持ち物は？』

あー、そういや聞いてないな。

「わからん。適当に」

『わかった』

そういつて電話を終えた。桜田のやつも暇なのかな。

外から微かに聞こえてくる蝉の音が暑さを現しているようで若干外に出る気が失せた。

だけでもう約束してしまったので後に引けない。それに彼女の為だ。

「僕も準備するかな」

僕の部屋へと足を進めていった。

第八話 「二日目の朝」へ「稀」(後書き)

こんにちは、まなつかです。

毎日の更新はちょっときついですので少し間が空くかもしれません。
んが御了承ください。

次回更新予定は 1 / 12 です。

感想、評価をいただけるとうれしいです。

第一話 「海へ」へ一稀

「よし、これで全員なんだよね」

何日ぶりに桜田の姿を見た。すっかり焼けてしまつて病院の中に引きこもつていて真つ白な僕とは対照的である。

美咲さんはスカートを穿いていて、それがまたよく似合っていた。その隣には高林さんが道端に咲いているようなスマレみたいに静かに微笑んでいた。白いワンピースがよく似合う。

「ちよつと待つて。あと一人」

美咲さんが桜田を制して言う。

「やーっ、すまないすまない！」

「うわっ」

思わず一歩引いてしまった。

Tシャツに半ズボン、サングラスをかけたおっさん——もとい、谷川が駆けてきたのだ。

「これで全員」

美咲さんがそう言った。

「え、谷川も？」

「うん……そう。もし万が一が私にあつたら大変でしょ」

「そうだよね」

なんだか少しがっかりだ。

「おお……さすが医者つてことだけあつて金持ちだな」

五人で谷川の高級車で海へと向かっている。

「いやいや、そんなことないよ。ローン組んでやつのことを買ったんだから」

「へえ」

運転席はもちろん谷川、隣の助手席に僕、後ろの3つの席に桜田、

高林さん、美咲さんが座っている。桜田は恥ずかしいのか黙ったまま外の景色を眺めていた。高林さんと美咲さんは僕が聞いてもどうでもいいと思えることを楽しそうに話している。

「いやあ、でもやるねえ。夏野もさ」

サングラスをかけたまま運転している谷川が前を向いたまま言う。僕も前を向いたまま言う。

「何がだよ」

「もう次の日にはデートかい。しかもダブルデートなんて」

「違うよ！ 遊びに行くだけだ！」

「まあ、いい一日になるといいね。笑うことから治る病気だってあるかもしれない」

「医者がそんなこと言っているのか」

「人間には科学じゃ解決できないこともあるのさ」

「そういうもんか」

「そういうもんですねー」

陽炎がゆらゆら揺れる道路を車は進み続けた。

「いやー、結構早くついたね」

ボタンと黒いドアを閉める。みんなそれに続いて車から降りる。

キンキンに冷え切った車内から熱したフライパンの上に放り投げられたような暑さの外に出るとなんだか目眩を起こしそうだ。

ただどそんなものの目の前の景色を前にしたら吹き飛んでしまった。

「海だーっ！」

高林さんが叫んでビーチサンダルをぺたぺた言わせながら砂浜へと駆けていく。

「待ってよ！」

それを追って美咲さんが砂浜へあがる。

ザクザクという足音は遠くへ行き、次第に波の音にかき消されてしまった。

「暑いな」

桜田が手をサンバイザー代わりにしながらつぶやく。谷川は鼻歌を歌いながらトランクからバカンスクーラーを出している。覗くと釣り竿などもあった。

「君……桜田くんだったか」

「は、はい」

「荷物持つの手伝ってくれないか？ ほら、夏野も熱中症に倒れることはあっても死なないから今日は酷使するからな」

「うわひでえ！」

僕の両手にずっしりと重いバカンスクーラーが置かれた。白い天板がきらきらと夏の太陽を反射していた。

第一話 「海へ」へ一稀《（後書き）

なんかもう脱力感というか、半ば鬱なのでとうぶん休載させていただきます。

休載だけに救済求む……なんてね。はは。

神様でも信じれたらいいんですけどね。信仰心がものすごい薄いので。

はは……ははは……

たぶん、そろそろもう一人の僕が別に連載作品書いてくれると思います。

私は、これで。

しばらく、さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0528q/>

ひと夏の記憶

2012年1月12日20時58分発行